千刈狸の呟き

～ 究極の介護食 ～

月影の狸

「・・叔母が、食べれず、眠れず、あちこち痛くて、とても具合が悪いのですが、病院へは行きたくないと言います。何とか連れてきますので、診てもらえないでしょうか？」

昔からの知り合いに懇願されて、93歳の女性に久しぶりに会ったのは、次の日だった。地域では、セレモニーホールの経営、運営など社長として腕を振い、地元では知らない人はいないのではないかと思われる「やりて」の１人だ。一番仲良くしていた従妹が急に亡くなり、落ち込みようは激しく、寝込んでしまい、食べたくない、眠れない、あちこち痛いし、何より咽喉に焼いた石を入れられた様に灼熱感が酷い。１日に何回も震える発作も襲いかかり、「人はこんな時、死んだ方がマシと思うんだろうな」と何回も呟いていた。最後に会った時とは、人相も変わり、随分小さくなってカタカタと震える姿には往年の面影はなかった。

治療のため他の医療機関へ紹介する事や、当院に入院する事も勧めたが、本人が「家にいたい」と拒否したため、家族と相談し、時々通院しながらの在宅介護が始まる事になった。

説明が付きづらい咽喉の灼熱感や舌の重度の乾き、亀裂などは、鬱病による「肝気鬱結」（気が伸びやかに巡らず、咽頭に気が鬱滞した状態）とみなして漢方を処方する事にした。さらに、自律神経系の不安定さ、不眠、不穏などが加わった状態と診断して、抗鬱剤や、眠剤などの他、必要に応じて補充する経口栄養剤も処方した。

摂食不良状態が長く続いて、重度の低カリウム血症があったため、専門医にアドバイスを求めたところ、「バナナと、海藻とインスタントコーヒーかな」との事で、取り組みやすそうだったので、そのまま家族と本人に伝えて、毎日少しづつでも食べる事にした。また、こちらで実際の食事内容を確認をするため、食事内容をメモしてもらう事にした。

実はその段階では、遅かれ早かれ、入院になるに違いない、それまで１日でも長く家で過ごせれば・・というのが、家族との共通認識だった。

在宅介護が始まって２週間後、来院した時には、状態は少しづつ良くなっていた。咽喉の灼熱感や震えの発作は、時々になり、何とか頓服薬などで乗り切っていると笑顔で答えてくれた。食事は主に、孫のＴ君が作ってくれていて、ありがたい事だと言っていた。

食事のメモを見ると、○月○日朝食：卵粥（アオサ、人参、椎茸等）、胡瓜の漬物、黒豆煮６粒、かぼちゃ汁、栄養剤25CCなどとしっかりと記載されていて、「孫さん、調理士さん？」と思わず聴いてしまった。約束の海藻も入っていた。コーヒーとバナナは、毎日のおやつにしていた。

その後も順調に回復して、歩行も少しづつ出来るようにもなっていった。食事メモも相変わらず、丁寧に記載されていた。

○月○日昼食―お粥、ナスと油揚の味噌汁、胡瓜の漬物、人参など煮物、黒豆煮６粒、あえ物（ほうれん草ともやし）とあり、あれ！？これは、もしかして霊供膳（おりく膳）？と気がついた。バランス良く煮物、汁物、和物などで構成された仏壇にあげる精進料理である。

聴いてみたら、Ｔ君は毎日、注文を受けた家庭に配達する、おりく膳の献立作成と調理を担当しているのだという。葬儀屋さんならではの、心のこもった究極の介護食だったのだ。

現在95歳の社長は、自他共に認める「看板娘」として、元気に過ごしている。「社長、生きてたのか！」という反応を見るのが、何より面白いと笑ってる、人生の達人でもある。